

心理臨床家は面接過程においてクライアントへの気がかりな反応をどのように経験しているのか：問題解決型の臨床心理士を対象に：[修士論文要旨]

著者	今久留主 舞衣
雑誌名	鹿児島純心女子大学大学院人間科学研究科紀要
号	9
ページ	24-25
発行年	2014-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1116/00000337/



心理臨床家は面接過程においてクライアントへの 気がかりな応答をどのように経験しているのか

－ 問題解決型の臨床心理士を対象に －

今久留主 舞衣

問題・目的

心理面接において、クライアントと心理臨床家の間では常にコミュニケーションが行われており、応答が繰り返されている。一般的に応答は、問いかけや呼びかけに受け答えすることを意味しているが(松村・山口・和田, 1998), 一般的な応答と心理療法で使われる応答では概念が異なっており, 原谷(2012)は心理療法場面における応答について、ただ単にセラピストの「発言」や「返事」という意味に止まらず、内的な感情、センスや気づきなどとしても使われる概念であると述べている。このように心理療法における応答は一般的な応答よりもより複雑な意味を内包しているといえる。心理臨床家はこの応答を用いて心理療法を行っているが、そもそも心理療法の目的とはどのようなものなのだろうか。心理療法の目的について岩壁は(2003), 心理療法の理論は変容の理論であり、何らかの変化を起こすことを目的としていると述べている。その心理療法の効果については、様々な研究において、クライアントとの関係性(向, 2003)や共感(横田, 2009), などが心理療法の効果に大きく関わっていることが明らかにされている。一方、心理療法を受けたクライアントが以前よりも状態が悪くなってしまうこと(Mick, C.・清水・末武, 2012)も指摘されており、丹治・橋本・安藤・東・小川(2008)は、「間違った介入、不適切なアセスメント、セラピー構造の崩れ」などが心理療法の失敗を引き起こしやすいということを明らかにした。

しかし、心理臨床家が同じ失敗をしたからといって必ずそれが同程度にセラピーを阻害するとは限らない。岩壁(2007)は、クライアントの治療関係にどれくらい大きな問題を引き起こすかという視点から失敗は大まかに4つのレベルに分けることができると述べている。失敗と一言で言っても、

そこに含まれるものにはいくつかのレベルがあると考えられ、岩壁(岩壁, 2007)の失敗のレベルと同様に、応答にもさまざまなプロセスが働いていると考えられる。

先述したように心理面接において、心理臨床家はクライアントへの自身の応答が、効果的な応答であるか、失敗をもたらす不適切な応答であるかについて、常に気かけながらコミュニケーションをしていると思われる。しかし応答とは、効果的な不適切かというように、二極化できるものではない。上述のように心理療法のポジティブな効果やネガティブな影響に関する研究は行われているが、心理臨床家の応答の複雑な性質そのものに関する研究はほとんど見受けられない。そこで本研究では、「心理療法において臨床心理士として行うクライアントへの応答の中で、クライアントに対してネガティブな影響を与える、もしくは与える可能性のある応答」を気がかりな応答と定義し、クライアントへの気がかりな応答を臨床心理士がどのように経験しているのかについてインタビュー調査を行い、現象学的アプローチによって質的に検討することを目的とする。

方法

研究協力者：臨床経験が5年以上であり、問題解決型のアプローチを行う臨床心理士3名。

手続き：リサーチクエスションをもとに質問項目をあらかじめ選定し、事前に作成したインタビューガイドに沿い半構造化面接でインタビューを実施した。インタビュー調査は2013年9月から2013年10月に行った。

場所：インタビュー調査は、研究協力者との打ち合わせによって決定した場所で行った。

リサーチクエスション：

1. 臨床心理士は、気がかりな応答への気づきをどのように経験しているのか。

2. 臨床心理士は、気がかりな応答を体験した際どのような感情を経験しているのか。
3. 臨床心理士は、気がかりな応答をとった理由を自身の中でどのように帰属しているのか。
4. 臨床心理士は、気がかりな応答についてどのように考えているのか。

分析方法：現象学的アプローチであるジオルジ(Giorgi, A.2009)の分析方法を用い分析した。

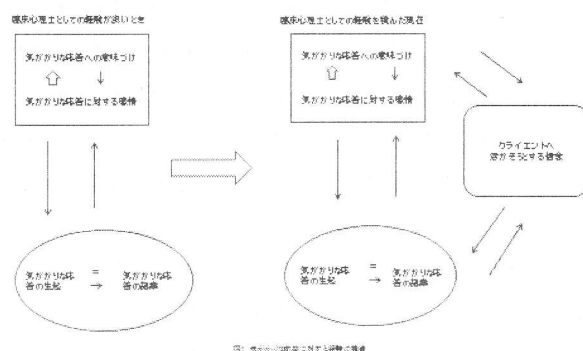
結果・考察

今回の結果より本研究における気がかりな応答は、セラピストの想定をクライアントが逸脱したと感じられた際、そこに介入しようとするものの、限られた選択肢の中から必ずしも最善の選択ではないが比較的良いという次善策を選ぶことしかできない場合に生起するという、加えて気がかりな応答は、クライアントの反応に意外性を感じたときに認識されることが明らかとなった。心理臨床家は気がかりな応答を認識すると失敗したと感じ、後悔といった感情を経験するが、失敗したという思考を切り替えようという感情も生起する。また、気がかりな応答を失敗のままでは終わらせたくないと感じ、クライアントへ活かしたいという複雑な感情を生起する。この複雑な感情から心理臨床家は、気がかりな応答を以下のように意味づけている。一つ目は、クライアントの置かれている状況を考慮し、限られた選択肢の中から比較的良好な選択肢を選ぶことで気がかりな応答は生起すると意味づけている。二つ目は、気がかりな応答を行ったことに対して自身の責任と意味づけている一方で、クライアントからも制限を心理臨床家が受けていると感じ、気がかりな応答が起こったのは自分だけに責任があるとはいえない状況だとも意味づけている。三つ目は、気がかりな応答は自分ではどうにもできない、避けられないものだとも意味づけている。このように心理臨床家は三つの帰属を気がかりな応答に対して行っている。

心理臨床家は気がかりな応答はクライアントのためにもない方がいいと考えているが、気がかりな応答はどれだけ気をつけていてもなくなるものではないと感じている。しかし、気がかりな応答

は自分にはどうすることもできないものだとも心理臨床家が納得していないからこそ、クライアントへ積極的に活かそうと考えている。臨床心理士としての経験が浅いときは失敗したということに囚われ自責の念が強くそれに支配されるが、臨床心理士としての経験を積むことで、気がかりな応答をクライアントへ活かそうという信念に至る。

心理臨床家の、気がかりな応答に対する経験の構造を図1に示す。



本研究の臨床的意義

気がかりな応答が生起・認識されうる状況が示されたことにより、心理面接場面で気がかりな応答が生起したことに心理臨床家が気づききっかけとなるのではないだろうか。気がかりな応答はクライアントにとってはないほうがいいが、決してなくなることはないと考えられる。本研究の知見は心理臨床家が自らの気がかりな応答を再認識する一助になるのではないだろうか。また、今後気がかりな応答を行った場合どうしていくのか、気がかりな応答について考える一助となるのではないだろうか。

本研究の限界や課題

本研究では問題解決型のセラピストを対象に気がかりな応答をどのように経験しているのかインタビューを行った。今後は人間成長型の立場に立つ心理臨床家を対象にすることが課題となってくるだろう。また、本研究では、臨床経験が5年以上の心理臨床家を対象としたが、今後は臨床経験の浅い心理臨床家、さらに経験を積んだ心理臨床家を対象に調査していくことが課題となると考えられる。